

第3回 6教振（後期計画）検討委員会意見概要

令和元年8月5日

意見者	意見概要（回答または対応を含む）
【目指す人間像について】	
大隅委員	<ul style="list-style-type: none"> ・（第2回会議において）学び「続ける」だけではなく、学びが「つながって」いけないといけないと申し上げたが、これを活かして「学び続ける人」から「学びを生かす人」と変えたことは大変よかった。学習指導要領の趣旨でもある社会に開かれた教育課程にも合致する。「学びを生かす」ということは、学んだことが生活の中で生かされることや、小学校で学んだことを中学校で、中学校で学んだことを高校で、高校で学んだことを社会でというように、人生や社会で生かす方向に向いており、「山形の未来をひらく人づくり」につながる。学びが教科や学校内で閉じるのではなく、学んだ先は「山形の未来をひらく人」の育成であるという方向で取り組むことが大事である。 ・高校の探究科では、いずれの学校も地域課題解決型の課題研究を行っていると聞いている。文科省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」にも県立3高校が選ばれる等、地域と協働しながら、地域を学んでいく試みが始まっている。この方向性も活かしていけば、「学びを生かす人」が「地域をつくる人」につながるのではないか。
落合委員	<ul style="list-style-type: none"> ・「地域をつくる人」について、目指す人間像がより具体的になったと感じる。（「地域をつくる人」と聞いた）第一印象は、地域をつくるためにはそこで暮らしていけることが重要だが、地域にそのための仕事があるかということ。「地域をつくる人」を目指すためには、地域に残ることが出来る環境をつくることも同様に重要である。 ・子どもが地域の人に育まれているという気持ちを持ち、地域の人の子どもの役に立つことで自分が生かされているという気持ちをもつことで、よい循環になることが大事。地域への愛着が地域で暮らしたい、戻ってきたいという思いや（戻ってこられなくても）何らかの形で貢献したいという思いにつながる。地域を好きになることが基本である。
有路委員	<ul style="list-style-type: none"> ・「いのちをつなぐ人」について、（目指す人間像としての）文言は変わらないが、説明部分に「多様性」が盛り込まれたことは良かった。学校現場では、発達障がい等支援を要する児童生徒の増加もあり、多様性を尊重する教育が今後一層大事な視点と考える。また、多様性と同様「個性」についても盛り込みの検討をお願いしたい。 ・「地域とつながる人」から一歩進んだ考えである。地域の課題について自分は何ができるかを考え、自分事として人生をデザインする人を目指したい。
渋谷委員	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に住む人だけで「地域をつくる」ことは限界がある。住んでいる人のみでなく、「継続的かつ多様な形で関わる者として」も含めた考えであることがよい。地域のお祭り等で関わっている人等の、関心のある人を巻き込むことは大事である。「地域」の変更については賛成である。

真壁委員	<ul style="list-style-type: none"> 概ね賛成だが、曖昧な表現・比喩表現を具体的に言い換える必要があると考える。 ①「いのち」の「生命の縦糸・横糸」という表現、②「学び」の「しなやかに生き抜く」という表現。これらは解釈が分かれる場合があり、具体的な表現があると分かりやすい。「地域」で、地域社会のつくり手は誰かという点について、県内進学率は低く、県内回帰も進まない現状で、県内リソースをどうするかという整理が必要である。
【基本的項目案】	
千葉委員	<ul style="list-style-type: none"> 「『いのち』をつなぐ人」は、とても大きな項目であり、私たちにとって大事なことである。子どもは、親を選べないし環境を選べない中で育っていく。遊びを通じた体験の中で、「自分は大事な存在である」と感じさせながら育てている。幼稚園教育要領にある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」としての10の姿で小学校に提示して、小学校以降の育ちにつなげるようにしているが、小学校でどれくらいつなげて子どもをみているか疑問である。気をつけて対応しないといけない子どもだけでなく、いい子でいる子ども心の中では葛藤しているので、きちんとみてつないでもらいたい。小学校高学年になった頃の姿をみていると残念な思いをもつケースもある。家庭環境の中できちんと育っていくために、読書活動も大切である。幼児期に読みたい絵本について保護者がわからない場合もあるので、広く知らせてほしいと考えている。親子で絵本を読むことは、親子のふれ合いにもなり、大事なことである。
高見委員	<ul style="list-style-type: none"> 不登校の子どもを持つ親が気軽に相談できる場所がほしい。学校に相談するにも先生は忙しい、他の保護者とも孤立しがち、ということがあるので、親に向けた情報や学校だけでないスクールカウンセラー等のような相談できる場がほしい。 施策4の家庭教育の充実について。望ましい生活習慣や道徳について子どもにどの程度教えればよいのか親が悩むこともあるので、「子どもの生活習慣に関する指針」の普及啓発や保護者向けの学習機会の提供に力をいれてほしい。
國井委員	<ul style="list-style-type: none"> 学校の多忙化により、教員と連携がとりづらい状況もあるとのことで申し訳なく思う。 学校現場では、多忙化解消のため働き方改革の取組みを進めている。1つには、事務作業の軽減。本校では、家庭訪問をなくした結果、年度当初に先生に余裕が生まれ丁寧な生徒指導がなされている。もう1つは、精神的負担の軽減。保護者の苦情や、虐待の疑いがある子ども・発達障がいが見られる子どもへの対応等、精神的な負担が大きい。教員が子どもと向き合い、特別支援教育や生徒指導の力を高めることが、本当の意味での働き方改革につながる。
大隅委員	<ul style="list-style-type: none"> 虐待に関連して、スクールカウンセラー（SC）だけでなくスクールソーシャルワーカー（SSW）等の配置を盛り込んでほしい。虐待や子どもの貧困等の家庭の問題は学校だけでは対応が難しい。地域にあって幼少期から家庭の状況を知るSSWは学校にとって大きな存在になる。

	<p>→＜義務教育課＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ S S Wについては、家庭への働きかけに有効であるとして H28 年度より県教委から各市町村に派遣している。具体的には、H28 から H30 年度までは 8 市町に、今年度は 9 市町に派遣している状況である。各市町村の声を聞いてまいりたい。
國井委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校現場では、S C よりも S S W のニーズが高い。天童市にも 1 名配置されたが、福祉と連携が進むと各校で取り合いの状況。S S W のニーズは大きく、学校がこれを担うことは難しい。是非、S S W の充実を進めてほしい。
黒田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語（英語）教育は、言葉を学ぶことに焦点が当てられがちだが、言葉を学ぶ以上に、文化や相手との関係性をきちんと構築するということが大切である。そのためには、相手を尊重し、相手にはどんな文化があるのか学ぶことやマナーも大切である。例えば、学生のインターンシップ等において学生に表現の仕方を教えると相手に対する敬意や思いやりを表すことが出来る、そうすると相手からも評価される。それを生かしてまたがんばろうと思う。キャリアを輝かせるために、マナーである。 ・キャリア教育の点からいうと、キャリアとは、働くことだけでなく家庭生活、人生全てに関わることである。子ども達には、それぞれの学びを生かす場所はあるということを伝えたい。そして学びを活かせる環境づくりをここにいる人々で行っていかなければならない。
真壁委員	<ul style="list-style-type: none"> ・施策 7 について、超スマート社会（Society5.0、AI）に求められる資質・能力として「読解力・計算力」等が上げられているが、「理数教育」の方が結びつくものであり違和感がある。ただし、「基盤」となるものとしては「読解力」が必要ともいえるので、本文等に記載する際工夫してもらえればよい。 ・施策 9 について、プログラミング教育は、小・中・高校すべてで行われるもので、小学校でプログラミングの体験を通して論理的思考力を育成し、中・高校では、問題の発見・解決のために行われるものである。また、I C T 教育で育成すべき最も肝要なことは、情報活用能力である。そのために、環境の整備も促進する必要があるし、I C T 支援員のようなサポートスタッフ等が必要ということも盛り込んでほしい。
大隅委員	<ul style="list-style-type: none"> ・各高校ではそれぞれ様々なキャリア教育を進めている。ゴールは施策 10 にもある社会的自立である。自身の勤務校では前籍校で不登校経験のある生徒が多く、保護者を含めて高校を卒業するだけで精一杯という者が多かった。平成 28 年から 2 年間、国のキャリアカウンセラー事業を受け、その後も県のキャリアカウンセラー事業の対象となった。その結果、地元就職希望者が増加した。地元企業とのマッチング等をカウンセラーが担い、人手不足の背景もあり、卒業生の 6 割が就職するようになった。キャリア教育の成果が表れた一例である。学校側でも地元仅此の企業があり、仕事があるということをもっと認識する必要があると感じた。一方、教員だけでは担うことが難しい分野であり、教員の負担軽減のためにもキャリアカウンセラー事業の継続について、後期計画に盛り込んでほしい。働き方改革の流れの中にあるが、外部人材の力を借りる方向性で進めてほしい。

落合委員	<p>・わが子の高校の先生は、「必ず地元に戻ってきなさい」といつも話してくれていた。(こういう言葉は)子どもにとって、地元に関わりたいという気持ちが心のどこかに残るのではないかと思う。保護者として嬉しいことである。</p>
栗田委員	<p>・政府の施策により外国人材の活用が進み、ものづくりの現場においても地域人材が減っていくと考えられるが、日本人は外国人と比較すると「力強さ」に欠けると感じる。地域で若者を育て、地域からものづくりをする人材を育成していかなければならない。</p>
高橋委員	<p>・施策 11 について。H19 年度から特別支援教育がスタートし 12 年が経過しようとしている中では、もはや「切れ目なく支援するために、確実な引継ぎを行う方法を検討(資料 3 P 9)」では遅く、「検討」し「方法を構築し、確実な引継ぎ」が行われていなければならない。同様に特別支援教育コーディネーターについても「育成」段階は過ぎ、今後は(育成された)コーディネーターを中心に学校力をつける必要がある。これからの 5 年間の見通しとして、より進んだ取組みをしていかなければならない。</p> <p>・障がい者雇用がクローズアップされる中、特別支援学校においてもキャリア教育は重要。特別支援学校においても「学びを生かす」ようキャリア教育に力を入れるべきである。障がいのある児童生徒の現状からみると地域を「つくる」とまではいえないかもしれないが、目指す人間像「地域」・「命」においては、弱い立場の人のことを考え、意味あいを広く取ってほしい。</p>
有路委員	<p>・「切れ目ない支援体制の構築」に関連して、発達障がい(LD、情緒等)がある中学生の場合、進学受入先に苦慮している現状を知ってほしい。試験を介するためそれまでの学びが順調につながっていかず、保護者、関係者で大変苦勞している現状がある。</p> <p>・施策 8 において、「英語」と「グローバル」を分けたことは良かった。全国学力学習状況調査においても、英語・数学の力不足が指摘されており、英語学習は今後重要になる。また、施策 12「学習意欲の喚起」の取組み例として「優れた教員の確保」が挙げられているが、最初から「優れた」力をもつ教員はいない。新規採用教員の場合、3 月までは大学生だった人が 4 月当初から教員として働かなければならない。他県では 3 月中に研修を行う等工夫している事例もあると聞くが、学校現場では深刻な問題。教員の力をつける研修の内容が大切になる。</p> <p>→【教職員課】</p> <p>・本県の教員選考にあたり特別選考を実施している。①他県で働いてきた現職教員、②講師、③加点(英語や特別支援教育等の免許状をもつ専門性の高い教員)。要件の見直し等も行い教員の確保に努めている。(新規採用教員の研修についても)貴重な御意見として承る。</p>
阿部委員	<p>・SSWは、学校にも家庭にも関わってくれ、行動範囲が広いので助かっている。地域が成長するためには、子ども達を育てることで、地域の人にも刺激を受けることで地域の教育力が上がると考える。施策 13「時代の進展に対応した学校づくりの</p>

	<p>推進」について意見を申し上げますと、高等学校は地域ごとに実情が違うので、実情を考えることが大事である。地元就職したいと考えても、発達障がいや不登校の生徒にとっては難しい。地元でバリアフリーの場所や地域の人とふれ合う特色のある高等学校があってもよいと考える。</p>
渋谷委員	<ul style="list-style-type: none"> ・施策 16 については、前期計画から引き続き後期計画でも取り組むべき、後期でも終わらない課題である。日本遺産については、東北に 7 箇所あるうち 4 箇所がある本県は資源に恵まれ、地域の誇りになっている。文化財を核として地域振興をすることが大事である。 ・ふるさと塾で学んだ子どもが大人になり、地域の支え手になっている。地域から出た人も関係ある人として地域を支える人材として期待したい。
落合委員	<p>・施策 17 「学校と家庭・地域との連携・協働の推進」に取り組むためには、コーディネーター等の活動を束ねる人として、学校以外の協力する人材が必要である。その際、コミュニティスクール（CS）が必要との声もあるが、イメージがわからないところである。自分の住む町では公民館で子どもを集めて、様々な体験をしている、夏季休暇には学生ボランティアによる学習会をしており、地域での社会教育が行き届いていると感じる。</p> <p>→【生涯学習振興室】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターは小学校単位で配置されているが、今後、広域コーディネーターを配置し各校のコーディネーターと連携することで情報共有や地域との連携を促進することが出来ると考えている。 ・CS は、地域学校協働本部を受け皿に学校の設置者が設置することになる。
池田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ機会の提供として、都会ではマッチングアプリを使って、人・場所を決めるとも聞き、ネットの活用が進んできた。今後 ICT によるスポーツの機会の創出での新たな対応になる可能性がある。 ・スポーツ環境の整備においてスポーツ医・科学センターの「機能促進」では弱い。アスリートだけでなく一般の人でも機能向上できるような支援が必要。次世代アスリートへの支援として、一貫した指導体制の構築が必要。スポーツ分野でも、次世代の人へ支援することで、山形で育ったアスリートが（県外に出ても）将来地元へ帰ってくることに繋がる。スポーツを通して山形県が元気になるという視点で取り組みを行ってほしい。 ・昨年度、スポーツ界では問題が噴出しスポーツ・インテグリティの考え方が広まり、中央団体ではガバナンスコードが定められ、通報制度や情報開示などが盛り込まれた。部活動やスポーツ分野では、指導者との上下関係が強く、パワハラ・セクハラ等の被害を声に出せない場合が多い。いじめの SNS 相談窓口のように、理不尽な対応に声を上げやすく、声を上げた人が不利益を被らないシステムを確立してほしい。 ・後期計画は、今後 5 年間を見据え、山形県でこういう子どもを育てたい、という施策を示すもの。誰が、何を、何のためにするのか。親、学校、地域、それ以外のカテゴリもあるかもしれないが、バランスを見ながら主体性をもって取り組めるよ

	<p>う考えてほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近年、県内の災害が多い。身近でもわが子の避難場所が分からないという保護者がいた。危機管理の在り方について、自分の命を守る方法として親子とも考えていく必要がある。
黒田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の英語学習が始まるが、何のための英語学習か（日常会話のため、論文等を書くため等）を考える必要がある。話すことも大事であるが、書くこと（文法）も英語学習には効果が大きい。一方、小学校の先生は英語が専門の方ばかりでないので、そういった先生が悩んだときに相談できる人・窓口（例えば大学のような）があるとよい。地域で英語を使う（学ぶ）場がもっと増えていくと良い。
有路委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の部活動の位置付けに課題がある。少子化により単一中学校では部活動が維持できない状況にある。学校の枠を外して部活動が出来ないか。また、様々な競技がある中で、〇〇中学校では△△部がないから別の中学校に行くという例も実際ある。スポーツの基盤となる部活動の位置付けの問題であり、学校の枠を外して取り組むことができないか検討していくべきと考える。
高見委員	<ul style="list-style-type: none"> ・施策 13「時代の進展に対応した学校づくり」とあるが、子どもが受験に直面すると、金銭的負担も含め親子とも受験ストレスに見舞われる。学習の在り方が、高校へ合格することありきにならないようにする必要がある。 ・地域資源や伝統文化に触れる活動を進める場合、「地域」の括りをどこまでとするか。お祭りの場合、小中学校は休校となるが、高校・大学は学区等の範囲も広く休校まではならない。地域の活動に高校生・大学生が活かさないことは残念。学校、家庭、地域が同じ方向を向いていくことが大事であり、そのためには、地域の大人が子どもと一緒に行動していかなければならない。
涌井教育委員	<ul style="list-style-type: none"> ・6教振（前期計画）策定時に検討委員として関わったが、その頃と比べると、世の中が変わったという感想をもっている。しかし、その中で変わらないことは、教育は、学校だけではできないものであり、社会全体で共有、協働して行うものであり、その中で自分達も育っていくということである。
片桐教育委員	<ul style="list-style-type: none"> ・「やまがた子育て応援プラン（県子育て支援部作成）」の検討委員も務めているが、そちらの内容と重なる部分が多い。社会・経済の変化は大きく、天災・人災（事件）も増えている。学校・地域・家庭でいかに命を守るかを伝え、教えていくことが必要である。
森岡教育委員	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す人間像について、「学び続ける人」から「学びを生かす人」、「地域とつながる人」から「地域をつくる人」に変えたのは、前期計画より一步前進したところだと思う。また、委員の意見を聞くと、さらに「子どもの教育環境の仕組みのつながり」というのも必要であると感じた。 ・近年、学校現場でスクールソーシャルワーカーのニーズが高まっているとのことだが、これは社会で子どもを守る力が弱まったことを表していると思う。そういう中で子どもたちを育てていくためにも、教員の働き方改革を進め、教員が余裕をも

	って児童生徒と接することができる環境を整備していかなければならない。
山川 教育委員	・（学校の働き方改革が掲載されたが）先生方の過剰労働、多忙化解消に向け今日の意見をどのように生かし、具体的な施策をつめていくか考えたい。
三浦委員 長【総括】	<p>・目指す人間像については、説明文言等に検討の余地はあるが、事務局からよい修正をいただいた。</p> <p>・基本的項目案は異論なし。1点目として、前期計画から後期計画へ次のステップへ進むべき。2点目は、目指す人間像と施策をリンクする枠が出来たと考える。共通のキーワード（いのち、地域等）により、各施策を縦割りにせず見落とさないようにしたい。3点目は、主体は誰か（誰によるべきか）ということバランスを見ながら明確にすること。</p> <p>これらについて、今後検討を進めていくこととする。</p>